注

[1]座談会「犯罪と刑事政策あれこれ」刑政９０巻１号３９頁，79.01.01。

[2]長谷川久「強者の自由」刑政９５巻５号２２－３１頁，84.05.01。

[3]安原美穂「アメリカ管見－年末のごあいさつ」刑政９６巻１２号１２－１３頁，85.12.01。

結論

本論文は，基本的に機能主義の立場に立っていないので，行刑制度あるいはそれをその一環とする社会制度全体の機能は何であろうという質問に答えられない。しかし，これはありふれた質問であるため，ここで強いて答えてみる。行刑制度の機能は，抑圧ではないし，教育でもない。行刑制度は抑圧，教育などの要素（象徴）をもって，社会制度の全体の一員になることを機能としている。そして，社会制度の機能は深層を反映することである。深層は抽象的な個と個の関係であるので，その反映としての表層の社会制度は，当該社会に住んでいる者にもっとも「快適な」環境を提供することを機能としている。現実上，日本社会は，少数者の力の支配を容易にする性質を持っている。しかし，これは単なる偶然ではない。何故なら，国民の全体は，深層を通して，多少ともこの表層における社会制度（小数者による力の支配）の形成に与しているからである。社会は少数の支配者によってつくられたものではないのと同様に，少数者のためにつくられたものでもない。日本人にとっては，日本より過ごしやすいところはないであろう。従って，元首相が逮捕され，皆が法治主義の健在を讃えたり，警察による某政党本部盗聴事件に憤慨を覚え，法治主義の形骸化を慨嘆したりして，矛盾だらけの行動が日常茶飯事のように発生しつつある。というのは，これらの事件はすべて根源と関係のない些細な出来事であるからである。従って，些細なことに反対しようとする者も，適当に反対して，それで十分である。社会はこういった反対行為によりひっくり返ることがないし，その存在は平和の象徴にもなるので，結局，全員が現状に満足するわけである。天皇制反対から刑事施設法案反対まで，すべてこの範疇の反対行為に属する。よくいわれているように，日本はおかみの支配の社会である。しかし，上記の観点に立って見ると，これは単なるカムフラージュでしかないのである。何故なら，全員が責任のある場合は，逆に全員が責任なしということになりやすいからである。

確かに，日本人にとっては日本社会が世界のどこよりも素晴らしい社会である。しかし，まさに国民があまりにも社会そのものと癒着しすぎて，結局反省の能力を全部失ってしまったのである。物質の文明は，短期間につくられたが，精神的文明はほとんどつくられていない。能力がないわけではない。やりたくないだけである。些細な雅に拘り，そこに日本の美を求めたり，外部の文化をどんどんと吸収しながら，消化不良のままそれを捨てて

いく。これらは全部証拠として残されている。このような社会は一見して柔軟性を持っているようであるが，実はこれほど堅い社会は日本以外世界のどこにもないのである。堅い周縁に包まれ，保護されている社会は，逆に外部にもっとも弱いのである。というのは，その行動基準が外部で適用できないからである。適用範囲を日本社会に限定する行動ルールは，日本社会において，せいぜい異質分子の排除や社会底辺の人権の無視くらいの不都合（これらの欠陥が日本人でない者に見られた場合）を生み出すだけである。９０年の夏のある日，もともと非常に混雑し賑やかな入国管理局の窓口が一夜でからからになってしまったことを目撃し，ぞっとするのは，筆者一人だけではないはずであるが，これは大したことではない。在日韓国人の待遇，指紋押捺なども同性質のことである。というのは，これらは異質分子の排除だからである。これに対して，社会底辺の人権無視があまりにもひどすぎて，社会の一般通念に反するおそれ（最底辺の周縁の崩壊のおそれ）のある場合は，「不都合」の心理を利用し，国連の調査団などを呼べば，状況が若干改善される。そうすると，崩壊の寸前の最底辺の周縁は再生される。在日韓国人三世の場合は，これとはやや異なる。中途半端な改善策から見てもわかるように，日本はかれらを世界の情勢と関連して，最底辺の周縁の穴を修復するための小道具として利用しているだけである（日本国民ではない日本人？）。ところが，集団的に外部との接触の場面になると，従来の行動基準がきかなくなるので，動物じみた攻撃行為，あるいは防御行為をとる以外，対応の仕方がわからないようになる。外部の社会と接触してから，近代日本がすでに二回（日清，日露戦争などを入れると，回数がもっと多い）も同様な経験をした。憲法がどう変わろうとも，三回目の経験がやってこない保障は全然ないのである。まして，この表面上の歯止めである憲法は，深層に対する反省から生じたものではないため，事実上棚上げされている。

本論文の目的は，決して一つの解決を見つけることではなく，むしろ，新しい視点と研究方法の提供をもって，非力でありながら，日本の刑事政策の研究ひいては日本社会に貢献しようとするところにある。勿論，前提としては，本論文の価値が認められることである。本論文は行刑組織の機関誌の資料に基づいて行った分析であるので，本論文の論理構造を非難しようとするなら，その第一歩は，公表されている「事実」，あるいはこの事実の虚偽性を暴く「真の事実」に基づいて，本論文と同様な視点に立って対立する結論を出さなければならない。このことは，研究者の場合にも当てはまる。論理が飛躍的だと評しながら，「全般的な反論（日本型行刑論というわけのわからないものでない，日本の文化

にそう本当の行刑論）」を提出しないなら，そこまでであるが，こういった反論が出てくる可能性は十分ある。何故なら，細かい議論にふけって，大きな視点を欠いているのは，行刑をめぐるいままでの議論の最大の特徴であり，欠点でもあると思われるからである。そう考えると，思想を行刑論から文化論まで昇華させることを研究者に期待するのは，過剰期待になる。

学問の進歩を阻害する要素の中で，最大のものは，既成のルールの下で形成されていた言語ゲームの中にルールの細かい部分を修正することにとどまり，ルールを決める当言語ゲーム外に存在する力に目を向けないことである。勿論，この力の形成と運動をめぐって，もう一つの（当言語ゲームと相対的に存在している）言語ゲームが存在している。そして，この外にある言語ゲームを包むもっと外にある言語ゲームが存在しているかも知れない。こういった重層の言語ゲームでの人間の位置は，案外に一般の観念と異なっている。重層の言語ゲームを幾重の皮によって包められたボールに例えていえば，人間は，決してボールを操る者ではない。逆に，人間はボールの真中，すなわち真っ黒の空間に位置されている。人間の思索の力は，皮を切るナイフでなく，むしろ針のような光である。つまり，皮を破壊するナイフでなく，暗黒に光明をもたらす光をもって，人間は絶えずに，もっとも身近な皮を刺し，境界の知らない「外」へ逃げようとしているわけである。これこそ人間の価値である。

もっと重要なのは，光をもって外へ逃げようとする者は，ボールの真ん中にいる人間でなく，逆に中心から離れてもっとも底辺，つまり皮に一番近くにいる「周縁人」である。世界は周縁人によって破壊されることは一回もなかったが，周縁人の力で，世界は絶えずに進歩していくのである。

日本の表層社会は階級のない平坦な憲法体制という外形を有しながら，天皇を頂点とするピラミッドの構造をしている。重層的な上下関係だけでなく，各層にそれぞれの中心と周縁が存在している。この構造は硬い周縁によって包まれている。下層の周縁に対しては，情けを与えながら，その自生的な能力を剥奪している。これは，最底辺の周縁である受刑者に与える待遇によって示されている。

憲法は光を集結し，人間の力を一滴も残さずに絞り出す戦略を提供している。憲法に従って，本論文は一つの戦術を提供した。受刑者に光を持たせる方法以外に，すべての自由な周縁人は，最底辺の周縁に集まって，そこから一縷の光でなく，束になる光をもって表層の殻を貫通する方法が存在している。前提条件としては，現実を見つめて嘔吐（反省）

する者（実存主義の信徒？）が多ければ多いほど集結することである。自由な周縁人は，ほとんど最底辺に住んでいないから，行刑の現実を見ても嘔吐しないかも知れない。しかし，日常生活からその最底辺との関係を切り離すのは，深層の本領の一つである。すべての表層での制度や慣行が深層によってコントロールされていることが真であれば，日常生活において発生した嘔吐感は本質上受刑者の中での反抗者の嘔吐感とは同様であるはずである。つまり，最底辺にメスを入れることが事実上できない場合でも，自分の所属している層から，中心と周縁，上層と下層の関係を変えなければならないのである。従って，日常生活に吐き気を感じないあるいは感じても変えようとしない者は，光を持っている本当の自由な周縁人ではないのである。こういった自称の自由な周縁人は，結局深層にコントロールされ，最底辺の実態を批判することをもって，周縁の住民に情けを与える似非自由な周縁人でしかあり得ない。拘禁二法をめぐる攻防戦から明るみに出ている日弁連の動向，日弁連によって公表されている資料は，一般人にほとんど影響を与えていないこと，遊びでなく本格的に行刑を研究しようとする研究者の数が少ないこと，日本的な行刑理論が存在していないことなどから見て，本当の自由な周縁人が少ないことがわかる。これはほとんどの人が深層にコンロールされていることの証拠である。

自由な周縁人が少なく，受刑者の光もほぼ完全に消された現在，最底辺の周縁にもっとも近い刑務所におけるもう一つの住民である刑務官が期待される。ところが，おそらくすべての刑務官は次のように考えているであろう。われわれは一所懸命に受刑者の社会復帰に努めて，受刑者の利益のために一生を捧げたのに，世間一般がわれわれの苦しみを理解してくれない。確かに，平行刑職員は犠牲者であり，汚い仕事をしながら，できる限り自分の思っている「改善・社会復帰」処遇を実施している。しかし，迫害者はどこにもいないし，処遇もあまり効果があがらないのである。というのは，迫害者は肉体を持っている人間ではなく，むしろ最底辺を必要としている社会，制度，慣行そのものであり，そして，こういった社会，制度をつくった者は，刑務官を含む大多数の人間であるからである。自分の生活を受刑者の待遇と比較して，刑務官の人権でさえ保障されていないのに受刑者の人権は論外であるという感覚を持っていたり，自分によって管理されている最底辺が存在していることに対して満足を覚えたりする限り，深層のコントロールから抜け出ることができなくなる。しかし，現に，こうなっている。

筆者は窒息するほど吐き気を感じている。外国人，特に外国留学生（洋の東西を問わず）を対象とするアンケート調査が沢山行われているが，結論はほぼ同じである。最初は魅惑

を感じている。時間が経つにつれて，段々にその感情は疑問，嫌悪，無関心に移っていく。これは決して，一人一人の日本国民に対する感情でなく，むしろ日本の雰囲気に対する気持ちである。筆者は最後の段階に到っていない。というのは，最後の段階に入る前に，窒息しそうな雰囲気を感じたからである。その原因は，筆者が軍隊生活（徴兵）の経験，（軍）刑務官の経験をしただけでなく，戦前，戦時中半世紀も日本に支配された母国が日本に寄りつつあるという危機を感じていることである。この窒息しそうな感覚は日本の現実や未来と関係のないものである。結局，筆者の感覚は無関心という一言で表すことができるかも知れない。

無関心は別の言葉で表すと，日本社会に溶け込みたくないという感覚であり，日本国民の無関心（安堵感）とは次元が違う。これができるのは，まさに深層の形成に荷担していないし，コントロールされていないからである。コントロールされているという言葉は，非常に使いやすい言葉である。これを使うと，被害者意識が湧いてきて，ひいては責任を放棄することができる。草の根のファシズムを忘れて，ひたすら天皇の戦争責任を追求したり，在日韓国人を平和公園から追い出そうとしながら，平和運動を行ったり，企業の製品を消費しながら，企業の公害海外輸出を非難しているなどは，決して日本の平和と安定化を守るための行動でなく，単に汚い現実に荷担していない安堵を実感するための行動にすぎないのである。というのは，コントロールとは，自己によるコントロールでしかないため，深層によってコントロールされているに際して，ちょっとだけの工夫さえすれば簡単に安堵感を得られるからである。管理者は単なる支配者ではなく，むしろすべての者の代弁者であり，安堵感を得るためのターゲットでもある。自民党の議員は絶えず汚職しながら，自民党は永遠に不滅である。大蔵省，矯正局その他のいわゆる中心は，本質上自民党と同様な役割を見事に果たしている。

日本は現在深層の地殻変動を経験しはじめているといわれている。若者の間に浅田彰氏の逃走論が流行っており，そして現実の社会に，日常的生活に実践されている。ところが，出てきたのは単なる私欲的個人主義の象徴であるミーイズムでしかなかった。これはそれ以上進んでいくと，深層不在の社会，つまり物欲氾濫の社会（不毛の砂漠）になってしまうか，あるいは旧来の深層との癒着がさらに進行し，もっと露骨な保身的で孤立的社会になるという二つの道しか残されていない。本当の文化的社会の理想が遠ざかっていく。憲法１３条の規定があり，この半世紀の間，他の国に比べればずっと有利な条件におかれているにもかかわらず，日本は４６年の時間を浪費した。ピラミッドの構造を根（行刑）か

ら崩す機会が新憲法が実施されてから，何回もあったが，国民はすべての機を逸していた。そして，現在日本はいよいよ儀式のクライマックスに迎えている。これはすべて，憲法に規定されている人間像を日常生活に実践できず，古い深層を破壊し新しい深層を共同でつくることに失敗したことに由来している。

深層と表層での行刑制度の関係を知りながら，これを批判するだけで終るのは，責任の放棄である。行刑に参加していないとか，参加が許されないというのは，単なる口実にすぎない。というのは，全般的に表層を支配している深層が共通の場を提供しているからである。もっとも深層に接近している最底辺の周縁の問題（行刑）であるだけに，専門分野と関係なしに，批判者と自称するすべての者は，責任を果たさなければならない。その方法としては，監獄法改正問題を議論するだけでなく，身回りの日常生活において実践しなければならない。これは日本の現実の社会に生きている人間に残された唯一の道である。

ある意味では，現在はまさに山崎正和氏のいう透明な停滞の時代である。知りながら，決して歩みたくない道が存在している。一方，４６年間，文化的手段で紛争を解決する力を身につけることに対する責任を放棄してきたことについて，反省の色さえも示さないで，企業の素晴らしい海外「侵略」が，その背後に軍が存在していないことによるということを知りながら，自衛隊の海外派兵の問題をめぐって，日本の国際的なイメージを高め，企業のさらなる発展をはかるためには，一部の国民にミサイルの飛んでいる「安全地帯」に派遣し死んでもらうべきかどうかを議論しなければならない状態に追い詰められている。他方，国家のイメージが薄くなっている時代における柔らかい個人主義（紛れのない似非個人主義）を享受し，一銭も多国籍軍に出さないと叫んで，責任のない平和主義を楽しんでいる。何故軍隊を自衛隊に改名したか，何故日本には真の平和外交を実行する能力がないか，何故企業の海外進出とリンクしている高金利貸与をＯＤＡと呼んでいるかなどの問題は，湾岸危機及び日本のとるべき姿勢とは関係のないこととみなされている。これはまさに象徴的な出来事である。使命ともいえる憲法の道を歩みたくない心理は，誰しもわかっている本当の深層である。従って，最後に一言いおう。愛する日本人よ。堕落せよ。そうすれば，自由になる。